みんなで考えよう
公共交通⑫

こいこいバス運行5周年

問い合わせ　大竹市地域公共交通活性化協議会（自治振興課内☎㊾2142）

こいこいバス（運行開始当初は「おおたけ幹線バス」）は平成21年10月26日に実証運行を開始し、利用状況は好調で、平成24年4月1日に本格運行に移行しました。今年の10月26日で運行開始から5周年を迎えます。

こいこいバス導入の背景

大竹市では高齢化が急速に進んでいます。今はマイカーを利用されている方でも、将来的には公共交通を必要とする人が多くなると考えられます。そのため、買い物や通院などの日常生活を送るうえで、便利で使いやすい公共交通の整備が必要であると共に、公共交通が整備されることで、大竹というまちが、にぎわい、元気になることを目指して整備を進めることになりました。

幹線交通検討分科会の活動

こいこいバスの整備を進めるにあたり、「大竹市の公共交通をより便利にしたい」という思いをもった市民の方を「幹線交通検討分科会」の委員として公募しました。

分科会は「みんなで理解し、みんなで決定する」ことで事業への愛着が生まれ、街宣活動やバス停の設置交渉など分科会委員が積極的に取り組んできました。また、運行ルート、ダイヤ、運賃などを検討して実施してきました。

今後は、こいこいバスの利用者に対してアンケート調査を実施し、アンケート結果から挙がってきた課題の改善策を検討していく予定です。反映できるものは反映させ、サービスの向上に努めます。

幹線交通検討分科会の様子

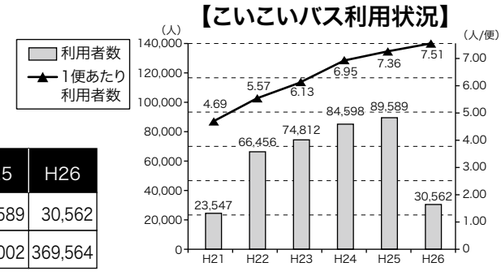
利用状況・運行状況

運行開始当初の1便当たりの利用者数は4・69人でしたが、平成25年度には7・36人と、約2・7人増えました。年間の利用者数は平成22年度は6、456人でしたが、平成25年度は8、589人と、約2万3千人増えました。利用者数は毎年順調に増えており、本年12月中には累計利用者数が40万人を突破する見込みです。

収益率（運行経費に対する運賃収入と広告収入の合計の割合）は、平成22年度は43・81％でしたが、平成25年度は63・57％と、約19・8％改善しました。

持続可能な公共交通にするため、運行経費の半分を運賃収入で賄うこととし、1便当たりの乗車人数6人、収益率50％の目標を設定しましたが、それぞれ平成23年度、平成24年度に達成しました。

【こいこいバス利用状況】



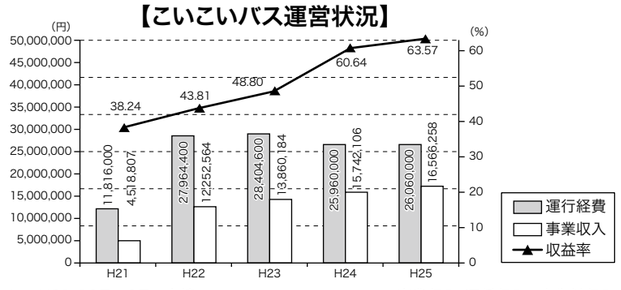
※　H21：10月～3月の実績、H26：4月～7月の実績

【運行開始からの累計利用者数】

年　度	H21	H22	H23	H24	H25	H26
利用者数	23,547	66,456	74,812	84,598	89,589	30,562
累計	－	90,003	164,815	249,413	339,002	369,564

※　H21：10月～3月、H26：4月～7月

【こいこいバス運営状況】



※　H21：10月～3月の実績　　事業収入：運賃収入＋広告料収入

「バスの日」は無料運行します

こいこいバスの運行開始日である10月26日を「バスの日」としています。

今年は10月26日㈰にこいこいバスを無料運行します。

多くの皆さんのご利用をお待ちしています。

幹線交通検討分科会委員の声

こいこいバスが運行５周年を迎えるにあたり、幹線交通検討分科会委員 11 人のうち 10 人の委員から、こいこいバスに対する思いなどを伺いました。

今日、高齢化が進む中、車を持たない人は、毎日の買い物や通院に大変苦労しています。

平成 21 年３月に大竹市の公共交通の基本方針が示され、こいこいバスの整備内容を検討するための幹線交通検討分科会の委員に応募して、今日に至っています。運行開始前に神戸市住吉台のくるくるバス、長崎市の乗合タクシー、山口市の公共交通システムを視察し、それらを参考にして運行ルート、運行時間、バス停の設置など協議を重ねてきました。平成 21 年 10 月 26 日の出発式からはや５年を迎えます。今年中には運行開始からの累計利用者数が 40 万人を突破しようとしています。

これからも長く皆さんに愛され、こいこいバスにつながる、支線交通が多くできることを望んでいます。

幹線交通検討分科会
会長　岡野 俊彦

幹線交通検討分科会
副会長　長光美佐子

本年中には累計利用者数が 40 万人を突破する予定です。これも皆さんのおかげです。市民の公共交通はこいこいバスだね、という声を多くの皆さんから聞いて、分科会委員になって良かったと思います。熱い思いで５年先を考えれば、バスが２台増え、待ち時間が短縮され、更に利便性の良いこいこいバスになってほしいです。

これからも長く市民に親しまれるこいこいバスになることを願っています。

幹線交通検討分科会委員
正木 敏夫

こいこいバスが運行開始から５年を迎え、喜ばしいことです。

高齢社会が進む中、免許証を返納する人も多く、ますます外出することが難しくなっています。元気に外出し、知人に会うことが認知症を防ぐ一番の薬だと思います。今後、外出が難しい地域で支線交通の検討が進むことを望みます。

平成 21 年３月に市内でも「高齢化が進んでいる」湯舟町の現状を把握してから、活動が始まりました。急速な高齢化が進もうとしている中で、こいこいバスの運行計画の作成に携わることができたことは幸いだと思っています。

大竹市に住んでよかったと思われるまちづくりのため、 こいこいバスを皆さんで守り育て、こいこいバスを幹として支線交通の利便性を向上させ、市全体の公共交通を充実していけたらと思います。

幹線交通検討分科会委員
石本 勉

高齢社会を迎え、市民が暮らしやすく、地域が活性化することを目指して「こいこいバス」が運行を開始して、５年を迎えようとしています。

こいこいバスの運行により、買い物や通院などが大変便利になったと思います。こいこいバスの運行を永続させ、笑顔の輪が広がっていくよう努めたいです。また、こいこいバスの利用者増につながると思いますので、少しずつでも支線交通を整備してほしいです。

幹線交通検討分科会委員
井上 智都

５年前、駅前は送迎用の自家用車、タクシーで一杯でした。以前は「こいこいバスを利用しない」という話を聞き悲しくなることが多々ありましたが、今では、こいこいバスの定期券を買い、途中下車しながら利用している方もいるという話を聞き、感無量です。他県の人からは、「若い人を見かけない」と言われますが、確かに高齢者の独り暮らしの方が増えています。また、運転年齢の限界も懸念されます。

これからの高齢社会の中で、いつまでもこいこいバスが走り続けるように願っています。皆さんで、育て見守っていきましょう。

幹線交通検討分科会委員
田中 幸子

早いもので、５周年を迎えましたね。当初は、皆さんに利用していただけるように一生懸命ＰＲする毎日でした。平成22年に愛称を、平成23年にロゴマークを公募し、平成24年４月から現在の「こいこいバス」が運行しています。今では、市民の公共交通となり、市民はもちろん、廿日市市や岩国市の方も駅から乗車して、市内を巡り歩ける便利さ楽しさで喜ばれています。

これからもオレンジ色のこいこいバスがいつまでも走り続け、皆さんの公共交通となるよう守り、育てていきましょう。

幹線交通検討分科会委員
大越 夏子

公募で分科会委員になりました。当初はなぜ大竹駅から玖波駅間の運行なのか疑問もありましたが、議論を通して理解することができました。運行ルート・運賃の決定や愛称・ロゴマークを募集するなど、多くのことを行ってきました。愛称・ロゴマークは一目でこいこいバスと分かるものになり、よい整備ができたと思っています。また、当初の収益率 50%の目標は達成しました。つぎは、平成 25 年度の収益率 63・６%より高い目標値を設定して、皆さんと協力して利用促進に取り組みたいと考えています。

幹線交通検討分科会委員
三浦 清

幹線交通検討分科会委員
渡辺 徹

５年後のこいこいバスについて、今までのこいこいバスの運営状況の実績から私なりに試算しました。５年後の平成 31 年の単年度の利用者数は 12 万人、累計利用者数は 98 万人と推定され、収益率は 70%前半にまで改善される見込みです。今後、分科会委員として活動するにあたっての目標にしたいと思います。目標達成のため、委員の一人として、こいこいバスのサービスの向上、充実について、微力ながら継続的に努力していきたいと思います。

鮮やかなオレンジ色のバスに乗客の姿を確認すると、ほっと胸をなでおろすことがあります。着々と利用者が増え、５周年を迎えることを大変うれしく思います。平成21年５月の第１回分科会以来、仕事の合間を縫って極力出席しました。

生活するうえで特に欠かせない医療と買い物について便利な交通手段ができたことは、大竹市の「わがまちプラン」の基本目標のうち「生活基盤が整ったまち」の根幹になるものと考えています。

幹線交通検討分科会委員
中村 寛行

運行会社の声

有限会社大竹タクシー
代表取締役　山口 英賢

当社は「安全で安心して楽しいバスにしよう！」を基本理念として、事業に取り組んでいます。

おかげさまで、人命に係わる事故もなく、より信頼、信用が得られるよう運行を続けています。

今後も、安心してご利用いただけるように社員一丸となり、輸送の安全確保に努めていきます。

有限会社大竹交通
代表取締役　中島 教嘉

いつも、多くの皆さまにご利用いただきまして、誠にありがとうございます。

今後も、利用者の皆さまの安全を第一に考え、皆さまが安心できるような運行を心掛け、サービスおよび利便性の向上に努めていきます。

HAPPY BUS DAY

市民が中心となって考え、創り、育ててきた公共交通の５年間を振り返り、今後どう成長していけば良いかを地域公共交通活性化協議会会長に伺いました。

市地域公共交通活性化協議会
会長　小田 光範

地域公共交通活性化協議会の会長として、まずは素直に「こいこいバス運行５周年」を喜びたいと思います。

私は介護に関わる仕事をしており、中小企業の社長としての経済観念を生かせるのではないかと思い、大竹市の将来を考える中で引き受けましたが、就任当初は正直不安でいっぱいでした。しかし、市長をはじめ市の担当職員の熱心さ、協議会や分科会委員の皆さんや住民の皆さんの熱意で５周年を迎えることができました。まさに住民自治・官民協働の勝利だと確信しています。

大竹市に限らず、どの市町村も財政難です。この先、大竹市の公共交通が存続していくためには今まで以上に市民の知恵が必要です。５年後の「こいこいバス」は市からの補助金をあまり受けなくても運営が可能なまでに成長させたいと思っています。そのためには市民一人一人が株主になるぐらいの気持ちでいたいですね。持続可能な公共交通というコンセプトをこの先も続けていきたいと思います。

平成22年に大竹市の公共交通のシステムが国土交通大臣賞を受賞したことは、誇らしく強く記憶に残っています。全国で認められた「幹線と支線」という考え方を堅持しつつ、市民の皆さんの知恵で乗りきっていけば５年後、そして10年後でも堂々と大竹市の公共交通が存続すると確信しています。住みよいまちをつくるのは今や市役所や政治家の仕事ではありません。市民一人一人がつくるものです。私も微力ながら頑張りたいと思います。

ＨＡＰＰＹ ＢＵＳ ＤＡＹに感謝します。

これからも皆で公共交通を守り育てていきましょう

自治振興課長　吉田 茂文

「住民自らが創り・守り・育てる」これは大竹市の公共交通整備の基本的な考え方です。

おおたけ幹線バスは、市民の皆さんから公募した幹線交通検討分科会の委員の皆さんがいろいろと検討を重ね、実証運行を開始した後もさまざまな改善に向けた取り組みを行い、現在の「こいこいバス」ができあがりました。（平成24年度から本格運行に移行しています）

こいこいバスの運行開始からこの10月で５周年を迎えますが、おかげをもちまして、利用者は年々増加する傾向にあり、年内には累計の利用者数が40万人を突破する見込みです。

公共交通の話をすると「今は車を運転できるので必要ない」という声をよく聞きますが、今後ますます高齢化は進んでいきます。市民の皆さん一人一人が公共交通は自らが守り・育てるという意識を高めていくことが大切です。

皆さんは「モビリティ・マネジメント」という言葉を聞いたことがありますか。これは過度に自動車に頼る生活を見直し、公共交通や徒歩・自転車などを適度にかしこく暮らしの中に取り入れることで、地球や環境にやさしい暮らしへの転換を促す働きかけのことです。たまには、こいこいバスに乗って、車窓から見える大竹の風景を楽しんでみてはいかがでしょう。

これから10年、20年とこいこいバスが市内を走り、人が動き、市民生活が活発になることで、笑顔があふれ、元気でかがやくまちになっていくと思っています。

こいこいバス